

ケルトの夢

松本達郎

ひと昔も前のこと——と言っても米寿の近い私には、十年前ぐらいはほんの昨日のように思えるのだが——バルガス＝リョサが『ケルトの夢』(*El sueño de la Celta*)という小説を書き、その二年後に出た英訳がポストスクリプトで買えるというので、いささか胸をときめかせながら取り寄せた。私も現役時代の暮れ方には、英語教師としてはひとかどの職人だと自負してはいたが、人から「専門は」と訊かれると「ケルト研究」と答えるしかなく、「日本ケルト学会」やその前身の「日本ケルト学会議」に長くかかわった身にしてみれば、自分と同じ年に生まれたペルーのノーベル賞作家が、事もあるうに「ケルトの夢」などという題名の作品を書く奇態さに、このところ頓に居眠りがちな好奇心をすっきりと呼び覚まされてしまった。

そもそもスペイン語世界の人々は「ケルト」をあまり口にしない。古代史に興味を持つ好事家たちなら、ローマ帝国が膨れ上がって行く時代に、イベリア半島の北東部にはローマの歴史家からケルティベロと呼ばれる部族がいたとか、南部にはケルティコと呼ばれる部族がいたという事を知っている。エストレマドゥラからポルトガルにかけての地域に住んで、ローマに激しく抵抗したルシタノ部族の英雄ウィリアトゥスの名が、ケルト語で解釈出来る事も話題にのぼる。だが今のスペイン人にとってそれらの古代部族は、言ってみれば日本人にとっての『古事記』に出て来る土蜘蛛みたいなもので、彼らの遺伝子も今の自分たちのDNAに微かな影響を及ぼしているかなとは思っても、例えば大方のアイランド人がするように、自分たちは「ケルト人」の子孫だと吹聴したりはしない。ついでに言えばケルティベロ部族やケルティコ部族の人々が、ギリシア語で「ケルトイ」、ラテン語で「ガリ」と呼ばれる人々を、自分たちと血のつながる親類だと考えていた様子は窺えない。

いずれにしても、古代のイベリア半島に住んだ様々な部族の記憶は、ローマ

帝国崩壊後一千年にわたるアラビア支配の歴史の大河の底に沈んでしまった。レコンキスタを経てルネサンスで古典文献から呼び戻されたイベリア部族民は、新生の意気盛んな「スペイン人」や「ポルトガル人」の典型として担ぎ上げられたが、「ケルト人」としてではなかった。セルバンテスはケルティベロ部族の城塞都市ヌマンシアの悲運を題材に戯曲を書き、長い兵糧攻めを耐え抜いた後、勝者に何の利益も与えぬよう、財物一切を焼いて集団自殺を遂げたヌマンシアの住民を、名誉と勇気を重んじるスペイン人の祖型として描いた。カモンイエスはヴァスコ・ダ・ガマの航海を歌う長篇叙事詩『ルシタニアの人々』(*Os Lusíadas*)で、インドへの苦難の船旅を成し遂げたポルトガル人の不屈の勇猛心の祖型として、何度もヴィリアート(ウィリアトゥス)に言及する。これはカエサルに征服された古代ガリアの住民の子孫だという記憶を失わないフランスで、近代詩人アルチュール・ランボーが、自分の体を流れる「ゴール人(ガリ、つまりケルト人)」の血を、カエサルの言葉を引きながら糞味噌に呪うのと、大いに趣が違っている。

今日のスペインで例外的に「ケルト」色を売り物にしている地方はガリシアで、ヨーロッパ大陸からアイルランドに「ケルト人」が渡ったのはここからだという伝えもあり、ア・コルーニャに立つヘラクレスの塔の近くには、アイルランドヘケルトの一族を導いた英雄の像まで作ってある。私が読んだ限りで最も「ケルト的」なスペイン語の小説は、ガリシア人アルバロ・クンケイロが書いた『マーリンとその一党』(*Merlin y su Familia*)で、時間を超越して長生きしている魔術師マーリンとグイネヴィア妃の会話を中心に、幻が華やかな現実の光を帯びる世界を描き出す。ガリシアはイベリア半島で唯一アラビアの支配が及ばなかった所だが、今日この地にケルト連盟諸国(スコットランド、アイルランド、マン島、ウェールズ、ブルターニュ)との繋がりを匂わせる文化遺産が見出せるとすれば、それは古代ガライコ族からの記憶ではなく、西ローマ帝国が瓦解してカトリック教会の通信網が雲散霧消した後、大西洋の波に洗われるヨーロッパ西の辺境で独自に発展した、いわゆる「ケルト教会」の聖者の布教と信徒の移住に負うものと私は考えている。蛇足を添えると、マーリンやグイネヴィア妃が登場するロマンス群の中心人物で、中世騎士道の華とされるアーサー王は、ガリシアの民話ではならず者騎士団の棟梁で、悪行が祟って騎士たちともども沼地の蚊の群れに変えられる。あまり「ケルト的」な扱いは受けていない。

ケルトの夢

そんな訳で、スペイン人でもないスペイン語圏の作家の「ケルトの夢」とはどんなものかと怪しみながらバルガス＝リヨサを読んでみた。意外な事にその中身は、ロジャー・ケイスメント (Roger Casement, 1864-1916) という一人のアイランド人の生涯を追う伝記小説だった。

ロジャー・ケイスメントという名前は、私を六十年昔の大学院生時代に引き戻した。当時私は、日本で「ケルト文学」とイエイツ研究の権威と目されていた尾島庄太郎先生の「演習」——近頃なら「ゼミ」というのだろうが——授業を受けていて、仲間と一緒に先生のイエイツ協会設立を手伝った。ご自身の邦訳『イエイツ詩集』の増補改訂版を出そうとされていた先生は、ある夏の宿題に、イエイツの『最後の詩集』 (*Last Poems*) からの数篇を弟子たちに割り振って翻訳させた。私は「ロジャー・ケイスメント」と「ロジャー・ケイスメントの幽霊」という題名の二篇を貰った。

その頃の日本でイエイツについての本と言えば、御大尾島先生の著書以外では、山宮允さんの美本『イエイツ詩抄』と、矢野禾積先生が注釈した研究社英米文学叢書ぐらいいしか無く、それらは主に詩人の初期中期の作品に詳しくて、晩年の詩にはあまり触れなかった。それに私はイエイツで論文を書こうとしているわけでもなかったから、ロジャー・ケイスメントが何者なのか全く分からず、付け焼刃の勉強に、出版されてまだ数年——海外の出版状況が即座に「検索」できる時代ではない——しか経ていないアンタレッカーの手引書とノーマン・ジェファーズの注釈付き選詩集を神田の北沢書店で買って読んだ。そこから得たロジャー・ケイスメントについての情報は、このアイランド系英国人の外交官が、第一次世界大戦中の1916年、あのイースター蜂起の直前に敵国ドイツに潜入して、武器の援助を取り付け、ドイツの潜水艦にアイランド沖へ運んで貰って上陸したところを捕えられ、国家反逆罪で絞首刑になったという事と、裁判に当ってロジャー・ケイスメントの日記とされる真偽不明の書き物が、筆者の「忌まわしい性癖」を証明して、被告の心証を悪くするのに大いに役立ったという事だけだった。その頃私はまだ「忌まわしい」(perverse) という言葉のセックスにからまる語義を知らなかった。英和辞書にも書いてなかったように思う。だから宿題の二篇の詩については臆げにしか意味が解らず、とにかく反英とアイランド愛国の精神だけは匂うように工夫しながら、ほとんど逐語訳して提出した。まだ捨てないでいる古いノートブックから、「ロ

ジャー・ケイスメントの幽霊」の試訳を、少しばかり修正して書き写しておく。

ああ、何が突然あの物音を立てるのか、
何が戸口に立っているのか。
あのものが海を渡れなかったのは
ジョン・ブルが海と仲良しだからだ。
けれどここは昔の海ではなく
ここは昔の岸辺ではない。
何があの嘲りの唸りをあげるのか、
海の唸りの中のあの唸りを。
ロジャー・ケイスメントの幽霊が
いま、扉を叩いている。

ジョン・ブルは議会を代表して立った。
犬にも得意絶頂の時が来る。
国家がこの男を誉めそやす。
この男が物言うすべを知っていて
振舞や宴会の席上で
人みなが信頼せねばならぬのは
大英帝国であり、キリストの
教会であると説得したからだ。
ロジャー・ケイスメントの幽霊が
いま、扉を叩いている。

ジョン・ブルはインドへ行っている。
人はみな目を凝らして見るべきだ。
歴史がそこで証明する ——
血統の違う者は誰にしろ
この男のような遺産に恵まれず
この男のような乳を吸ったことがなく
正直というものを欠くならば
一家に幸運は訪れないと。

ケルトの夢

ロジャー・ケイスメントの幽霊が
いま、扉を叩いている。

私はある村の教会を探り歩き
この男の家累代の墓を発見して
抹香臭い薄闇の中で
読み取れる限りを書き写した。
高名な人が大勢いたが
誉も徳も朽ちて行く。
集まれ、愛しい怒れる者たちよ、
集まれ、そして叫んでくれ、
ロジャー・ケイスメントの幽霊が
いま、扉を叩いている。

といった按配で、もちろん、私の試訳は尾島先生の増補改訂版『イエイツ詩集』には採用されなかった。その後、事情があって私は尾島先生ともイエイツ協会とも疎遠になり、ロジャー・ケイスメントの名前も半ばは故意に忘れていた。そこへバルガス＝リヨサがやって来た。

バルガス＝リヨサの『ケルトの夢』では、独房で人生最後の数週間を過す死刑囚の心の揺らぎの描写と、波乱に満ちた行動の生涯の物語が一章ごとに交替して、死の瞬間をもって完結したロジャー・ケイスメントという人格に収斂する。対位法——という言葉を使うと音楽用語として不正確だと言われそうだが——を思わせる手法で、これを使って1980年代にウェールズの作家エミル、ハンフリーズが見事な小説を書いていた。私はあまり小説を読まないで、誰か大作家にこの手法の模範的名作があるかどうかは知らないが、教会音楽のフーガに通じる、一種の法悦に導く形式美があると思う。

バルガス＝リヨサの小説に書かれたロジャー・ケイスメントは、まだアイルランドという国がなかった1864年に、英領アイルランドのアルスターでプロテスタントの家庭に生まれた。父はインドやアフガニスタンで戦功のあった英国陸軍の大尉で、母は結婚のためにプロテスタントに改宗はしたけれど、決してカトリックのお勤めを怠らなかった。初子を抱いてリヴァプールの実家を訪れ

た時、母は内緒でロジャーにカトリックの幼児洗礼を受けさせた。このことが小説の中では、最後に重い意味を持つようになる。

ロジャーは九歳で母を、十二歳で父を失い、父方の大伯父（だか大叔父だか）の家で育ったが、リヴァプールの母方の叔母に可愛がられ、海運業に携わっているその夫から、未開のアフリカへの冒険心を植え付けられた。十五歳でこの叔父の職場の見習い職員に雇われ、二十歳で独立してアフリカに渡り順調に出世した。やがて実質はベルギー国王レオポルド二世の私有地だったコンゴ自由国の英国領事となり、レオポルドヴィル（今のキンシャサ）の南西マタディに近いボマの村におさまっていた三十八歳の時、本国の外務省から、コンゴ河上流地帯の原住民の実態を調査して報告書を提出せよと要請された。奥地の天然ゴム採取場で働かされている原住民が、恐ろしく残酷な扱いを受けているという噂が、ロンドンの原住民保護協会や、アフリカ宣教師を送っているキリスト教各派の教会の間に広まっていた、英国政府としてはその真偽を確かめる必要があった。

バルガス＝リヨサの小説には、ロジャーが見た現地の惨状が克明に描かれる。密林の奥のゴムの木の刻み目に湧く樹脂を採集する原住民労働者は、一日の末の収穫がノルマに満たないと、河馬の皮で作ったチコーテと呼ばれる鞭で容赦なく打たれる。チコーテには一打ちで皮膚が裂け、血潮が飛び散る威力がある。労働者が逃亡するのを防ぐため、彼らの妻子は人質として収容所に監禁され、雑役奴隷やセックス奴隷、時には虐めて遊ぶ玩具にされる。バルガス＝リヨサの資料蒐集は周到なもので、これらの記述がロジャーの報告書に基づくことは疑えない。だが、白人たちがやって来て住み慣れた世界が消えてしまい、逃れることも変えることもできない生き地獄にいる原住民が、自分たちの現状の「なぜ」を考えるすべさえなく、怒りもなく恨みもなく、望みといえばノルマの軽減ただ一つという姿に、ロジャーがアイルランドもその例外ではない「植民地」の本質を発見して、祖国の独立のために戦う意志を固めた、と書き進めるのは作家バルガス＝リヨサの——たぶんの確な——想像だろうと思う。

若い頃のロジャーは、アイルランド訛りのきつい英語を喋り、何につけてもアイルランドをひいきするので、仲間うちで「ケルト」（英訳本で The Celt）という仇名を貰った。ロジャー自身が、アイルランドの神話伝説を盛り込んだ「ケルトの夢」という長篇叙事詩を書いたこともあるという。バルガス＝リヨサの「ケルトの夢」というタイトルは、「ロジャー・ケイスメントのアイルランド

「独立」を単純に言い換えたものだと気付かされる。

ロジャーの報告書は英米をはじめヨーロッパ諸国の世論を動かし、レオポルド二世はコンゴ自由国の経営から手を引いて、この広大な私有地をベルギー政府に譲り渡した。ロジャーは英国政府から表彰され、サーの称号を与えられた。叙勲の儀式に呼ばれたサー・ロジャーは、膝を傷めて英国国王陛下の前で跪くことができないという理由で出席を断った。

退職して二年あまり、ロジャーはアイルランド史を勉強したりゲール語を齧ったりしていたが、蓄えが乏しくなって外務省から復職の誘いを受け、ブラジルのサントスでまた領事を勤めることになった。ここで四年を過すうち、ペルーの奥地で天然ゴムを採取している「ペルー領アマゾン会社」(Peruvian Amazon Company)で、原住民労働者がひどい仕打ちを受けていることをあるジャーナリストが告発し、会社の指図を受けた誰かに殺されたという噂が流れる。「ペルー領アマゾン会社」はフリオ・C・アラーナという素性のいかがわしい男が経営しているが、英国籍の会社で出資者のほとんどが英国人のため英国政府も放っておけず、外務大臣エドワード・グレイがサー・ロジャーに「君は虐待の専門家だから、この任務には最適」だと言って現地調査を依頼し、ロジャーは四十六歳になった夏、ペルーとコロンビアの境を流れるプトゥマーヨ川流域の、独裁者フリオ・C・アラーナが絶対権力を揮う地域へ旅立った。現地に足を踏み入れたロジャーは、密林の奥から人間狩りの「夜遊び」(correrías)で拉致され、会社の焼印を肌に押されて苦役にあえぐ原住民労働者を見て、たちまち「ここもコンゴだ」と悟った。ただここではコンゴ以上に、ひたすら会社のお蔭で命をつないでいる職員や地方の役人たち、それに一部の原住民労働者さえもが、事実を曲げたり隠したりしてロジャーの調査を妨害し、ロジャーを憤慨させて絶望の際へ追いやった。

バルガス＝リヨサがプトゥマーヨでのロジャーの心の内外を詳述する文章を、私がここで要約するのは無理だし無意味だから、結果だけを端折って書いておく。1912年、ロジャーが四十八歳の時に出了た報告書のお蔭で「ペルー領アマゾン会社」は倒産し、フリオ・C・アラーナは残虐行為を断罪された。会社に寄食する人々がプトゥマーヨの河岸に住み着いて、安普請の酒場や売春宿が繁盛した船着場の町も消えてしまい、今日のペルーの地図には、プトゥマーヨに集落を示す記号が見当たらない。

すっかり仕事を終えて南米を離れた四十九歳のロジャーは、本腰を入れて余生をアイルランド独立のため捧げようとする。ロジャーは以前ドイツに旅した際、ドイツ人がアイルランドの独立に好意的だ——それで英国の力が弱まるからだ——という感触を得ていたので、それを具体的にどう利用できるかを考えていた。よく言われるように、「敵の敵は味方」に違いなかった。

1914年に第一次世界大戦が始まると、ロジャーの計画は現実味を帯びるように思われた。ロジャーはアメリカに渡り、そこで知り合ったエイヴィンド・アドラー・クリステンセンと名乗るノルウェー人の青年と仲良くなり、——こんなことがどうして可能なのか、私には解りかねるが——彼の手引きでドイツに潜入する。

ロジャーはドイツで、捕虜になった英軍兵士のうちアイルランド人だけを收容した施設に出入りすることを許されて、その捕虜たちで「ドイツ軍のためでなく、ドイツ軍とともに」英国と戦う「アイルランド旅団」を鍛え上げようと努力する。だがロジャーの期待とは裏腹に、大多数の兵士はそのような試みを、祖国だと思っている英国に対する裏切りと受け止めてロジャーを罵倒する。やがてアイルランドから、独立運動の過激派が、1916年の四月に武装蜂起する計画があるという情報が伝えられる。ロジャーはドイツ政府と掛け合って、二万挺のライフルと十門の機関銃、それに五百万発分の弾薬を、ノルウェーの国旗を掲げた船でアイルランドに運ぶ約束を取り付けて、自身はドイツの潜水艦でアイルランドの岸に送って貰う算段をする。

バルガス＝リョサの小説では、ロジャーが単身アイルランドに渡ろうとした理由を、ドイツが英国制圧のため実際にアイルランド上陸作戦を起こさない限り、蜂起が成功する見込みは全く無いから、指導者たちに予定の中止を説得するためだったと書いている。これもバルガス＝リョサの想像のようで、当たっているかどうか私には解らない。武器弾薬を積んだ船は、結局は所在不明だったようだし、小説ではロジャーのドイツでの行動全てが、英独の諜報機関どうしの探り合いに踊らされていた可能性も匂わされる。

いずれにしてもロジャーは逮捕され、イースター蜂起は起って鎮圧され、その首謀者たちは銃殺された。イエイツが「1916年の復活祭」(“Easter 1916”)で絶唱したように

ケルトの夢

マクドナーが、マクブライドが、
そしてコノリーが、ピアースが、
この今から永劫にかけて
何処でも、緑の色が身に着けられる所では
変るのだ、完全に變るのだ。
恐ろしい美が生まれた。

ロジャーは裁判で、自分はアイルランド人で英国人ではないのだから、国家反逆罪には当たらないという以外の弁明はしなかった。絞首刑になったロジャーの肛門に、検死の医者はゴム手袋をはめた指を突っ込んで、括約筋が弛んで「忌まわしい性癖」の常習を示していると証言した。ロジャーが若い頃から痔を患っていたことを、バルガス＝リヨサは小説の中に何度も書き入れている。

バルガス＝リヨサの小説には、ロジャーが若い男性、それも多くは黒人青年の肉体美に見とれて恍惚となり、性行為に誘う場面が何度か描かれる。そういう記述が、ロジャーの裁判に当って、陪審員の目に被告を「忌まわしい」化け物に見せた、あの真偽のさだかでない「ロジャー・ケイスメントの日記」の中に実際にあって、バルガス＝リヨサがその「日記」を読んだことは疑えない。だがバルガス＝リヨサは小説の後書きで、自分の考えでは、ロジャーは実際に起ったことを記録したのではなく、こうなってみたかったという願望を作文したのだ、と言っている。これは本気だろうか。カトリック信徒の多いスペイン語世界では、まだこんな言い訳をして、著者自身の免罪符を貰っておく必要があるのだろうか。

ロジャーは間違いなくゲイだったと私は思う。同性どうしの性行為で受身を勤める男性は、他人が受ける肉体の苦痛に同調しやすく、いわゆる「人の痛みがわかる」人が多い。ロジャーがコンゴやペルーの原住民を見て感じる痛みは、並みの男が経験できない種類の、自分自身の肉の痛みだったに違いない。ロジャーとコンゴで出会って現地事情の手ほどきを受けたコンラッドは、その時の経験を基にして名作と言われる『闇の奥』を書いたが、原住民の惨状を描写する筆致は乾いて冷たい。『闇の奥』の主人公マーロウは「不幸な野蛮人」たちの境遇に、一瞬の哀れみは覚えても感情移入することはない。マーロウは「野

蛮人」とは「人種」の違う、男っぽい白人の男であり続ける。コンラッドはロジャーに向かって、「ケイシメント、君は僕を幻滅させて (deflower) くれたよ。レオポルド二世についても、コンゴ自由国についても。そして多分人生についても」と言ったという。「処女を奪う」という意味を持つ “deflower” を使ったのは、コンラッドがロジャーから男色の誘惑を受けたためだと勘ぐるのは、あまり褒められない行き過ぎだとは思う。だがもしあったとすればそのような経験は、通常の男の場合、誘いかけた相手に対する終生消えない懐かしさと羞恥と嫌悪の複合感情を残すだろう。ロジャーが死刑判決を受けた後、かなり多くの著名な人物の連名で国王に減刑嘆願書が出されたが、コンラッドはそれに署名しなかった。

ロジャーは猛烈な行動の生涯の最中に、宗教を考えることは全くなかった。独房で処刑を待つ日々が来て、——そのような境遇になれば誰でもかも知れないが——ロジャーは自分の生の意味を考えないでいられなかった。監獄を訪れるカトリック神父の薦めで、ロジャーはトマス・ア・ケンピスの『キリストに倣ねびて』を拾い読みする。やがてロジャーはカトリックの信仰が、愛と犠牲を基盤にしていることに気付く。イエズスは人類を愛するが故に十字架についた。ブライアン・ボルー以来のアイランドの歴史は、祖国を愛して自らを犠牲にした英雄たちの血で聖別されている。イースター蜂起の首謀者たちは、アイランドを愛して自らを犠牲に捧げ、英雄となって永遠の生命を得た。それはロジャーが心配した、蜂起の作戦の成否とは関係のないことだった。今それに気づいたロジャーは、遅ればせながら彼らの後を追い、愛するもののために自分を犠牲にする。そしてイエズスに倣うことができる。——ロジャーが神父に、処刑の日までに自分がカトリックに改宗する手続きが終えられるだろうかと訊くと、神父は古い教会記録を調べた上で、ロジャーはすでにカトリックの幼児洗礼を受けているから、改宗の手順を踏む必要はなく、ただ本来の自分に戻るのだと答える。ロジャーは神父に最後の告解をし、終油の秘跡を受けて絞首台に登る。このあたりのロジャーの心の動きの物語も、やはり全てがバルガス＝リヨサの想像だろう。それにしても英国系アイランド人のイエイツが、ダブリンの中央郵便局を占拠してアイランドの独立を宣言するピアースの姿に、伝説の英雄クホーランを見て感激しているのに比べると、ペルー人バルガス＝リヨサは、アイランド人にとってのイースター蜂起の意味を、より深く

ケルトの夢

読み込んでいるように私は思う。

バルガス＝リョサがロジャー・ケイメントという人物に興味を覚え、多くの資料を精査した上で長篇小説を書いた理由には、もちろんロジャーが自分の国ペルーで活動した事実があるだろう。だが『ケルトの夢』の、時に語りの流れを淀ませるほど執拗な、人間の卑劣さの追求には、何か特別な隠れた意図があるように感じられる。それが何かをぼんやり思いめぐらしているうちに、トルコのノーベル賞作家オルハン・パムクの小説『赤い髪の女』の英訳本 (*The Red-Haired Woman*) が手に入った。ここで私がトルコの現代文学にちょっかいを出すことについては、余計だと承知の上で長い言い訳をしておきたい。

キリスト教紀元 280 年にデルポイの神殿を荒らし、ギリシア人に「ケルト」と呼ばれた人々は、更に南東に進んでヨーロッパとアジアを隔てる海峡を越え、今のトルコの首都アンカラのあたりに住み着いて国を建て、ガラテア人と呼ばれた。彼らは周辺の小国の王たちに、勝ち戦では勇猛果敢だが、負け戦では一目散に逃げ走る傭兵を提供した。紀元一世紀後半にキリスト教を受け入れたが、すぐまた自然界の精霊たちを祀るようになり、新約聖書で最も古い文書とされる「ガラテア書」で聖パウロにこっぴどく叱られた。優れた言語学者でもあった聖ヒエロニムスが四世紀末にアジアに渡った時、ガラテア人は「ガリアの田舎者が喋るのと極めてよく似た」言葉を話していた。

ローマがペルシャとの戦争に疲れて滅び、イスラム教国が互いに争い、モンゴルが襲来し、セルジュック・トルコとオットマン帝国が興亡するうち、いつしかガラテアの実在は忘れられ、二十世紀の初めにガラテアの首都を探したドイツの調査団は、間違っただけでヒッタイトの首都を掘り起し、ボアズキョイ文書を発掘して鉄器時代黎明期のインド・ヨーロッパ語族研究に絶大の飛躍をもたらした。

そういうトルコだから、「ケルト研究家」を看板にしている私が好奇心をくすぐられない訳はなく、アンカラにガラテアの遺物を展示した博物館ぐらいはあるだろうからと、実地にトルコへ行ってみるために、少々はトルコ語の勉強などもした。現代トルコ語の辞典には、ケルト語を語源にする単語は一つもなかった。そうこうしているうちに、「古典文学」と「ケルト研究」でハーヴァードから博士号を貰ったフィリップ・フリーマンという学者が、ポシドニウスを深読みして古代のケルトを扱った面白い本を書き始め、おやおやと思う間もな

くガラテアとガラテア語についての周到な研究書を出版した。「ラテン語は少々、ギリシア語はそれ以下」の私としては、チャプマンが英訳したホメーロスに驚嘆するキーツの思いで、それらを読む他は無かった。ガラテアとトルコについては、そこまでだった。

それでもまだ「ケルト文学」という問題が付き纏った。マシュー・アーノルドに始まって、十九世紀末から二十世紀前半にかけ、世間では「ケルト文学」というものがあると喧伝され、「ケルト人」の血を引く作家の書き物には、何か共通した傾向がある筈だと考えられた。アイルランドやウェールズ、スコットランド、それにブルターニュなどの神話伝説が比較され、共通のエトスを探られている間はまだ良かったが、近代以降のヨーロッパやアメリカで「ケルト人」の血を引くとされる作家たちをつかまえて、作品に潜む「ケルト民族」に共通の特性を証拠立てようとし始めると話が怪しくなって来た。「ケルト人」の文学的特性としては、「自然の生命と自己の生命の一体感」、「生の驕りの肯定」、「理性の昼と妄想の夜の挟間に立つ薄明の想像力」、「キリスト教の父神信仰に背く異教の母神信仰」など、色々な人から色々なことが言われ、環境保存運動や抑圧体制批判、科学万能主義への反発、フェミニズムなどに利用されたが、私としては「ケルト民族」以外の「民族」が言われるような特性を持っていないわけでもなく、また「ケルト文学」という言葉も「ケルト語」——正確にはケルト語族の諸言語——で作られた文学という意味でしか使えないと考えていた。やがて「民族」という言葉を使うと、レイシズムを咎められる時代が来た。

それでもやはり、尊敬する指導教授の尾島先生が「ケルト文学」の権威で、英国のメタフィジカル詩人やロマン派詩人、十九世紀のアメリカ詩人などにも「ケルト的稟質」を認めるのだから、いつかは反対することになるにせよ、とにかく先生の路線で勉強しておくのは身のためだろうと、私も「ケルト人」の血を引くらしい作家や芸術家たちに「ケルト的稟質」を探る作業を続けて、ある程度は得心する場合もあった。ギリシア人の父とアイルランド人の母を持つアメリカ人ラフカディオ・ハーンには、かなり強いケルト臭があった——ハーンの短いエッセイにある、夜のカリブ海に行く船の甲板でジブシーの若者がギターを弾きながら歌うソレアレスは、私を一時フラメンコに狂わせた——が、スコットランド人を先祖に持つ帝政ロシアの作家レールモントフや、古代ケルトのボイイ部族が住み着いた国ボヘミアの小説家カフカについては何とも言え

なかった。ブルターニュからの移民の子ジャック・ケルアックには、私は「ケルト的稟質」を感じないけれど、ブルターニュの大学の文学部は、このアメリカのビート詩人を、ケルト魂の権化のように持ち上げている。

そうこうしている間にも、私の耳の奥の方では、兄弟子でもあり恩師でもある、夭折された大沢実先生が微笑みながら言われた、「あまり尾島さんにこだわると、イマジネーションは皆ケルト的だということになるよ」という言葉の余韻が消えなかったのだが、ほんの僅かでもケルトに繋がりのある物には一応流し目をくれる癖が抜けなくて、トルコについてもガラテアの名残の細片でもないかと、邦訳と英訳で無理なく手の届く限りの文学作品を拾い読みしていた。英訳の『ナスレッディン・ホジャ』を教室でテキストに使ったこともある。——ナスレッディン・ホジャは日本の彦一話や一休さん話と同類の滑稽談の主人公で、一種の聖愚者と呼べるだろうが、例えばある日近所の人から、荷を運ぶので驢馬を貸してくれと言われ、驢馬は死んだと答える。その途端裏庭から驢馬の鳴き声がして、嘘をつくなど責められると、「お前はわしという人間の言う事と驢馬という畜生の言う事の、いったいどちらを信用するのか」と切り返す。現代アイルランドのジョークにも似たようなのがあって、一瞬頬が弛むがそれ以上ではない。

オルハン・パムクの『赤い髪の女』という題名は、生粋のトルコ人には赤毛の女が珍しい筈だから、タキトゥスが『アグリコラ』に書いているカレドニア人の赤い髪との連想で、スコットランドから来た女性が主人公なのかと思われた。初めは邦訳で読んだのだが、巻末の解説が気に入らなくて英訳でも読むことになった。

オルハン・パムクの小説では、主人公の少年が、大学受験前の夏休みのアルバイトで、イスタンブール郊外の開発途上地に井戸を掘っている職人の助手になる。少年は親方が掘り取って行く土や岩石を、縄のついたバケツで井戸から引き上げて、空になったバケツを吊り下ろす。親方は昔気質の一徹者で、自分の見立てで決めた場所から水が湧くことを疑わない。掘り続けて深さが20メートルにも達しながら、まだ水の気配さえ見えないある時、少年は誤ってバケツを井戸に落とし、親方を殺したと思い込んでその場から逃げ去る。

それに先立って少年は、仕事場の近くで興行している旅役者の一座の、髪を赤く染めた女に恋し、一夜を共にする。女は以前、少年の父で今は妻子と別居

している左翼の闘士とも関係を持ったのだが、そのことは小説の終りまで伏せられる。

少年は大学卒業後、実業家として成功する。その年月の間にイスタンブールも発展膨張して、井戸を掘った場所も市街地に呑みこまれ、井戸そのものは封印される。やがてかつての少年は、自分が親方に傷を負わせはしたけれど殺した訳ではなかったこと、親方はその後も井戸を掘り続けて結局水は出たのだが、技術の進歩と立地事情の変化のため、井戸が無用になって閉じられたこと、あの赤い髪の女との一夜の交わりで彼には息子がおり、その息子は親方から昔の話を聞いていて、無責任な父親に悪意を抱いていることなどを知らされる。主人公は息子に呼び出されて、ある晩あの井戸のある場所へ出掛けて行く。息子の意図や人柄が全く分からない主人公は、用心にリヴォルヴァーを携帯する。翌日になって井戸の中には、自分の手に握ったりリヴォルヴァーに片目を打ち抜かれた主人公の死体が発見される。こういう因縁話めいたおどろおどろしい物語に、西洋文化の深層にある精神構造を示すとされる、ギリシア悲劇が描くオイディプスの父殺し（と母犯し）と、フィルダウスイーの『王の書』に出て東洋文化の深層を映すとされる豪勇ルスタムの息子殺しが繰り返して言及され、この小説が比較文化論を秘めた一種の象徴文学だという偽装が施される。だがそれに惑わされて読み解きを試みても、腑に落ちる答えは出て来ない。ついでに書き足すと、西洋でもアイルランドの伝説には、英雄クホーランがそれと知らずに息子を一騎打ちの戦いで殺す話があり、状況設定は『王の書』のルスタムに良く似ている。前世期の中頃に一時流行った説で、「ケルト人」はスキタイのクルガン文化を担った人々が西に移動したものだというのがあった。その説で行くならクホーランとルスタムは同一人物で、話の原型は青銅器時代の中央アジアにあったのかも知れないが、あてにはならない。そもそも西洋と東洋の区別など、どこに線引きすることもできない、全く曖昧なものだと私は思う。

オルハン・パムクは、建国時代に青年トルコ党がアルメニア人に対して行った行為を、集団殺戮（genocide）だったと認めようと発言して、2013年のデモ騒ぎ以後右寄りを強めるエルドアン政権から完全に「好ましからざる人物」（*persona non grata*）扱いを受けるようになった。トルコ人は時の権力からどんな仕打ちを受けようと、トルコへの帰属感を失わないと言われる。『赤い髪の女』を、オルハン・パムクというトルコ人の、祖国に対する弁明として読め

ケルトの夢

ば、私にはこれがトルコの現状を風論した念入りな寓意物語に見えて来る。

いくら掘っても水の出ない井戸を頑固に掘り続ける親方は、理想のトルコの出現を信じ続けるトルコ人の心で、建国の祖ケマル・アタチュルクから生身の欠点を取り除いた「アタチュルク」、つまり「父なるトルコ人」なのかも知れない。主人公の少年は、政教分離の原則を厳しく守る公立学校で、情報の詰め込みと客観テストだけで進級し、金儲けに役立つ技術と資格を得て世渡りに成功する、現代トルコ人中流層の典型に見える。場末の掛け小屋で古典物のパロディを熱演して観客を沸かせ、少年と一夜の契りを結んだ「赤い髪の女」は、西欧芸術が標榜する「自由」の影絵みみたいな存在だが、かつてケマル・アタチュルクもこの女と浮気した。自らの「主義」のために家族と別居しなければならない少年の父は、「主義」が「政策」に合わないため、ただ祭り上げられるだけの偶像にされたケマルに通じる。トルコでは親の世代の西欧化の夢が息子の世代のイスラム化に殺され、息子の世代の精神主義が親の世代の物質主義に殺される。『赤い髪の女』の主人公は、どちらに殺されたのか判らないが、とにかく死ぬ。理想のトルコは今、使われなくなった井戸の底に秘められた僅かな量の水になって、忘れられた場所で封印されている。

私の解釈は間違っているかも知れないが、こういう小説を読むと、バルガス＝リヨサの『ケルトの夢』にも、何か表面に出せない苦い動機があったと考えたくなる。1990年の大統領選挙で当選確実と予想されながらアルベルト・フジモリに敗れ、その後の歳月をペルー政界の腐敗と戦って過ごしたバルガス＝リヨサだから、ロジャー・ケイスメントが苦闘したプトゥマーヨの状況に、今のペルーの政治風土の縮図を見てもおかしくはない。ペルーだけでなくラテンアメリカ全域で、さらに言えば世界中で、大方の人々は正義も理想もそのけで、自分にじかに餌を——どんなに乏しく粗末な餌でも——恵んでくれる親分に盲従する。それをいやというほど味わわされたバルガス＝リヨサは、事情を知っている読者なら、登場人物のこれが誰、あれは誰と解るような寓意小説を書いているという気がする。だがそれを緻密に追跡して確かめる手立ても能力も、今の私には欠けている。

長い廻り道から、ここでイエイツのロジャー・ケイスメントに戻ろう。

イエイツは元来、独立運動の武闘派には批判的だった。先に引いた「1916年の復活祭」の詩の中でも、蜂起の首謀者たちについて、

あまりに長く続く犠牲は
心臓を石に変えることがある

という句を書き、平たく言えば「苛めを受け続けると偏屈になる」と思っている。それでも彼らの特攻隊精神の「恐ろしい美」には打たれずにいられない。イエイツ自身は英国議会がアイルランドの自治を認めるのを待つ穏健派で、やっと大戦後の1922年に英国の自治領のような性格を残した「アイルランド自由国」が生まれた時、その国の上院議員になって六年間勤め、1923年にはノーベル文学賞を貰い、名声赫々たる大詩人へと熟成して行った。若き日の尾島庄太郎先生は古希を越えたイエイツを訪問し、今でも詩を書いていますかと愚かな質問をして強く一言「イエス」とだけ答えられ、「禅坊主に一喝されたように縮みあがった」と、何度か懐かしそうに弟子たちに語った。

そのイエイツの晩年、イースター蜂起の首謀者たちが処刑され、ロジャーが絞首刑になって二十年の後、アメリカのマロニー博士という人物が『偽書ケイスメント日記』(*The Forged Casement Diaries*)という本を出し、ロジャーの「忌まわしい性癖」を示すとして裁判の時に利用された『日記』は偽作だったと証明した。もともと「忌まわしい性癖」とは無縁で、他人のそれを想像することもないイエイツは、その本を読んで我が意を得たと感じ、二篇の詩を書いた。「ロジャー・ケイスメントの幽霊」の方は先に私の古い試訳を引いたから、「ロジャー・ケイスメント」の方は色々な事情が解った上での今の私の試訳で掲げておきたい。イエイツは本来これらの詩を、街々に流れるアイルランドのパラッドのメロディーに乗せ、人びとに歌われることを願って書いたというので、私もせめて七五調の定型で訳してみたいと思う。中に出て来るライスという人名は、マロニー博士の本が出た当時の、英国のアメリカ大使セシル・アーサー・スプリング＝ライスだとジェファーズの注にあるのだが、イエイツは「アーサー」と「ライス」の間にハイフンを置かず離して書いているのを幸いに、音節数が合うよう「ライス」だけにした。

ケイスメントという人は
やるべき事をやっただけ
それで吊るされ死ぬなどは
別に新奇な事じゃない。

ケルトの夢

時の裁きに負けるのを
あの連中が怖がって
偽の文書をでっちあげ
清い名前に泥塗った。

偽の文書が本物と
嘘つきがする証明を
奴らは世間に言いふらす
それが新奇なことなのだ。

奴らの大使だったから
ライスは小声で言ったけど
喋りの得意な連中と
物書きたちが聞きつけた。

有象無象よやって来い
騒いだ野次馬みんな来い
にせもの書きの机から
詐欺師見捨ててやって来い。

一人一人が公に
せめて言葉で償おう。
石灰まみれで眠ってる
あの勇敢な騎士のため。

尾島先生はこの訳詩を採用して下さるだろうか。「これは少々不真面目だよ」と言われるのだろうか。「不真面目」は先生の最低の評語だった。ただもし先生にこの研究ノートを読んで頂ければ、私も私なりの真面目さで「ケルトの夢」を追って来たことは認めて下さるのではないかと思う。